MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．５．２６　発行元
第 359 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

太田蘭三「釣部渓三郎シリーズ」

今回は太田蘭三の『釣部渓三郎シリーズ』を取り上げてみることにした。ミステリの出来云々という以前に世間的には人気のあるシリーズだったように感じている。「気軽に読める」は大切な要素なのかもしれない。

太田蘭三という作家

太田蘭三が作家としてスタートしたのは１９５６年。最初は時代小説を中心に書いていた。太田蘭三の名義に変えてミステリ作家としてデビューしたのは１９７８年。今からすればかなり以前のことである。私は２０００年代になってから読み始めたので、既出作品を後になって追いかけた形である。

最初の頃は『顔のない刑事シリーズ』を先行して読んだが、『釣部渓三郎シリーズ』の方が面白いと思うようになった。

『釣部渓三郎シリーズ』特色

中心になる釣部渓三郎はレジャー・ライターとして登場してくる。主に釣り関係の情報発信を文章で書く仕事である。「釣部」は本名で「渓三郎」はペンネームと説明している。妻を亡くした独身者の設定。自由で気ままな生活ぶり。全国各地に出かけていく。日本の「山岳推理」の代表例である。森村誠一や梓林太郎の作品より娯楽性優先で、気楽に読むことができるシリーズ。

歴史小説と同じで、登場人物のキャラクターが一番の話の中心であり、それらの人物が活躍する展開の中で犯罪が起きる流れ。したがって、組織の方針を外れたり、常識外れの行動を取ったりがよく出てくる。「それもありなのか？」というご都合主義のストーリー展開もよくあるパターン。

北多摩署の馬さんも蟹さん（刑事の名前）も勢い単独捜査に飛び込み、事件解決後に怒られるパターンになる。通常の警察小説にはない形式と言えるだろう。まあ、作者自身も「ミステリ」の型に拘るつもりもないだろうから、「謎の追究」などは二の次で、通俗的なエンタメに徹するつもりで書いていると思う。

『顔のない刑事シリーズ』も…

太田蘭三ミステリの中心シリーズは『顔のない刑事シリーズ』。警察手帳を持たないで潜入捜査を実行する刺青を背負った刑事の話。こちらは更にハード・バイオレンス系だ。暴力団絡みの事件がほとんど。頭も使うけれども筋肉を使う場面も多い。読んでみて気に入るようであれば冊数だけはたくさんある。南英男や龍一京よりは評価できるような気がする。パルプマガジン風のその場限りの読み捨て作品群。ノベルスの全盛期にはこんな内容の本も多かった。今ではほとんどが忘れられてしまったけれども。

主な『釣部渓三郎シリーズ』

１．殺意の三面峡谷
２．奥多摩殺人峡谷
３．餓鬼岳の殺意
４．南アルプス殺人峡谷
５．殺意の朝日連峰
６．寝姿山の告発
７．謀殺水脈
８．密殺源流
９．殺人雪稜
１０．失踪峡谷
１１．仮面の殺意
１２．被害者の刻印
１３．遭難渓流
１４．遍路殺がし

講談社ノベルスから出たものが多い。「主な」と書いたのは、釣部は他のシリーズにも顔を出すから。北多摩署がらみの事件ではよくあること。探偵役ではなく、事件の解決にヒントを与える役目ということになる。

『殺意の三面峡谷』

１９７８年祥伝社ノンノベルス。太田蘭三名義でのミステリ第一作になる。釣部渓三郎シリーズの一冊目。最初の作品ということで力が籠っている。朝日連峰などの山のつくり、尾根、峡谷、登山道、渓流の説明が途轍もなく詳しい。私は地図を見ることが好きなので、何箇所も地図が出てくるのはありがたい。地図上で地形を読み取ることは、理科教員の地学を専攻した者にとっては大切な技術。私は登山も渓流釣りもしないが、雰囲気だけは十分に味わうことができる。

釣部渓三郎は多摩川で釣りをしていて、六十歳くらいの男性が溺れる現場に立ち会うのが最初の事件。助けようとするが無理だった。この男性の娘が上条アキで、このシリーズの主要な人物になっていく。亡くなったアキの父親は土地詐欺事件に巻き込まれていて、生きる意欲を失っていたようだ。その詐欺事件に関わっていた実業家の菱川豪蔵の名を知る。菱川はイワナを渓流で釣ることに熱中しており、やがて釣部と出会うことになっていく。菱川の死体が朝日連峰の最深部の沢で発見され、近くにいた釣部は身元確認を行う役目に。そして強引に事件の背景を聞き出し、山好きのアキと行動を共にして犯人探しの行動を開始する。シリーズの後の作品に比べるとずっと複雑に組み立てられていて、一旦解決がつきそうに見えながらも、更にその先があるという構造になっている。この時、警視庁北多摩署とは顔なじみの関係になっていく。